

芭蕉自筆を否定する文字たち

——『奥の細道』中尾本考——

はじめに

平成八年（一九九六）十一月二十五日、中尾堅一郎氏が所蔵される『奥の細道』の一異本（中尾本）が公表された。同本は芭蕉特有の書き癖が確認でき、貼紙など夥しい訂正も見られることなどから、上野洋三、櫻井武次郎氏によって芭蕉直筆の草稿本と断定された。また、芭蕉の弟子野坡やばが所持し、長く伝来が不明であった幻の自筆草稿本、いわゆる野坡本であるとの見解も出された。

ところが、「芭蕉自筆説をめぐって論議がある」と記されるように、この鑑定には批判もあり、未だその決着は見えていない。私も以前中尾本が芭蕉自筆か他筆かについて考察したことがある。その結果、①鑑定方法に客観性、信頼性のないこと、②中尾本は野坡本とは見なせないこと、③中尾本には推敲とは見られない、明らかに転

写の際の誤写を修正している個所が見られることがわかった。

拙稿で客観性、信頼性がないと指摘した中尾本の鑑定方法であるが、同じ方法で新たな芭蕉真筆の認定作業は続けられている。

一九九九年秋、『奥の細道』の軌跡展が国文学研究資料館で行われた。そこに中尾本と同箱で一緒に伝来した、新出『冬の日』も真筆として出品されていた。同本には芭蕉の偽印があったが、「この印記が、もし後代において、別人によって捺されたと考えればどうか」と印記の問題は棚上げにされ、筆蹟に「芭蕉の特徴的な文字の癖」が現れていることから真筆と認定されていた（同展図録参照）。芭蕉の印章については今栄蔵氏の研究が詳しい。今氏は、「近世期には筆蹟の模写技術が想像以上に高かったので、筆蹟のみに頼る鑑定には時として限界があり、有印の真蹟物の鑑定には印章の真偽がほとんど決定的な証拠となってくる」と断言されている。

山 村 孝 一

芭蕉の癖字を用いる新たな方法により、従来、到底真蹟とは認められなかった偽印のあるものにまで安易に自筆認定が出されるようになってきている。私には、これは研究の進展ではなく危機と映る。

上野・櫻井氏は、『全図譜』を始めとする図録の類を存分に活用して、眼の訓練を繰り返し返し、『全図譜』収載の五百点近い芭蕉の筆蹟をも同じ審査の台に置いて、中尾本の鑑定に向かわれた。そして、「行きつ戻りつ試行を重ねて、「自筆本」が「自筆」に違いないと説明する方途をさがした」という。

両氏が採られた方法は、まず、中尾本が芭蕉自筆であるという仮説をたて、後から裏付けを探すという演繹的方法であった。確かに、中尾本に「芭蕉らしい」文字があることは否定できない。しかし、その一方で、「芭蕉らしくない」文字の存在も確認できる。

本稿では、肯定的要素を演繹していく方法ではなく、否定的な要素を一つ一つ積み上げ、それでもなお中尾本が芭蕉自筆の草稿本と見なせるか、両氏とは逆の、帰納的方法で確認してみようと思う。

なお、今回問題とする中尾堅一郎氏蔵の『奥の細道』に対し、上野・櫻井氏は「自筆本」「野坡本」等の呼称を使われているが、本稿では、現作者の名を採り、「中尾本」に統一することにした。

一 上野氏の鑑定方法について

中尾本5丁表15行目下部にある「神」の字形は、旁が「甲」になつていて非常に特異な形をしている(図1参照)。このような字形は『芭蕉全図譜』(以下、『全図譜』と略す)や一般の字典類にも見出せず、中尾本芭蕉自筆説に対する疑念は増す。そこでまず、上野氏が行われた自筆鑑定とその有効性から検証してみようと思う。

上野氏は中尾本に「芭蕉にのみ特異な文字群が集中してあらわれ、しかも全体が、爽快な流れで貫かれて、矛盾がない」ことから、自筆という判定を下された。その規準となった文字群は以下の通り。

- ① 旁の「圭」の部分を「佳」のように書く、一画多い「涯」。
- ② 「夕」の一点が足りず「イ」のようになる「死」。
- ③ 「大」が「石・右・衣」の草体のように余計に撥ねる「契」。
- ④ 「永」のように見える「求」。

この他にも、「葦・佳・岸・権・骨・暫・摺・植・驟・多・塚・扉・聞・茂・予・離・籬・料・寮」など都合23字が「芭蕉の書き癖」として挙げられている。^⑦

これに対し山本唯一氏は、「死・契・佳・岸・権・骨・暫・驟・塚・茂」などの反証を挙げ、上野氏の基準文字が、①当時通行の異体字である、②版本など芭蕉以外の一般文献にも見られることから

その有効性を批判されている。^⑤

村松友次氏は、曾良本にある中尾本に酷似する書体を62例指摘された。^⑥ そのうち、「涯・死・佳・岸・権・骨・暫・摺・植・驟・多・扉・聞・茂・予・料・寮」などは上野氏の基準文字と合致する。

村松氏も中尾本芭蕉自筆説であるが、その中尾本と酷似する書体が曾良本にも多数見られることを根拠に、これも芭蕉自筆であると主張されている。しかし、上野氏は、曾良本は芭蕉ではなく、弟子利牛が「芭蕉の草稿を謹直に写した」ものと考えておられる。^⑦ となると、山本、村松両氏の指摘だけでも、基準となる23文字中19字が「芭蕉にのみ特異な文字群」の条件から外れてしまふ。

上野氏のように、芭蕉特有の字形を基に真偽の判定を下すならば、村松氏が主張される、多くの字形が一致する曾良本も芭蕉自筆と認定されてしかるべきであろう。しかし、上野氏は、曾良本は自分が読みとれた所は自分の書き癖で写していて、全体として、「どこかに自筆本の雰囲気をかすかに残しながら、結局は別の書風」という理由で、村松説を退けられている。

図1「神」のように、中尾本には『全図譜』に見出せない特異な字形が存在する。これを上野氏の言に当てはめると、中尾本も曾良本同様「芭蕉の草稿を謹直に写した」本と見ることも可能である。

以前拙稿でも述べたが、字形を基準に客観的、絶対的な真偽判定

を下すことは不可能である。これは前出^④「求」を例にとつても明白である。この「永」のように見える「求」は、山本、村松両氏の指摘にもなく、唯一、「芭蕉にのみ特異な」基準文字として使えそうである。ところが、『芭蕉庵三カ月日記』模写本に^⑧とまつたく同じ字形が見出せる。結局、「芭蕉にしか書けない」、あるいは「芭蕉しか書かなかった」文字・字形などは存在しないのである。

今宋蔵氏によると、芭蕉の偽物が出回るようになったのは没後間もない頃からで、弟子桃隣が芭蕉の十七回忌追善に出した「粟津原」宝永七年（一七一〇）刊にも、次のような記述があるといふ。^⑨

蕉翁自画賛並短尺、諸国にとゞまり、帰依の面くは重宝の一物になせり。画は猶、短尺に迄似せありて紛らはし。其贗を正すべき目利なければ、正筆に極て秘蔵せし族もあり。殊勝の至ながら、謀筆の工人、神霊の祟もおそろし。今は其古筆の実不実見分るもの世に稀也。

芭蕉の真蹟を真見した直弟子が存命する時代から、既に偽物が出回り、その真偽を見分けることができる人も稀であったという。

上野氏の方法を櫻井氏は「芭蕉筆跡を判断する上での科学的な方法」と賞されている。ところがその実態は、^⑩中尾本全文をコピーし、表面に見えているフリガナ、見せ消し削除の文字をも含む一万

六百を超える文字を一字ずつ切り離す。②それぞれ文字毎のグルーブに分け、一字一字ノリで貼りつけてまとめ直す。③文字のかたまりを、「縦・横・斜」に存分に眺めまわした眼で、別の芭蕉の筆蹟を眺め、一字一字比較検認の作業を行うという方法であった。¹⁶⁾

光学的な機械を導入するでもなく、最終的には人間の眼で真偽の判定を下す、そのような方法に、「科学的」と言う言葉は適さない。

以上、上野氏の「芭蕉」のみ特異な文字群を使う鑑定方法は、①自筆鑑定の客観的、絶対的基準とは不適切、②科学性、客観性、実証性もない、ということから有効性に大きな疑問符が付けられる。結局、上野氏の方法では、「芭蕉」の文字に似ている」ということは言えても、「芭蕉自筆」と断定することは不可能なのである。

二 中尾本に見られる通常と異なる文字について

上野氏は中尾本にある、ある画が一画多い、欠けている、本来ない場所に書かれている、部首が別の形になっている等の、「通常の字体と異なる特徴を示す漢字」を抽出し、自筆鑑定に使われた。¹⁷⁾

この基準で再度中尾本を観察すると、上野氏が挙げられたもの以外に、前述の旁を「甲」と書く、「神」など、明らかに「通常の字体とは異なる特徴を示す漢字」が多数見出せた(図II参照)。以下、『全図譜』と対照させながら、具体的に検証してみようと思う。

① 「神」の篇が一画足りない字形(11裏10・23裏10・24裏9)。
 ② 楷書「軍」の一番下の横棒がない字形(11裏10)。

③ 「厂」を用いた「摩」の省略形(16表1)。

④ 横棒が一画多く「見」になっている「兎」(14表6)。

「神」は前出の行書だけでなく、①のような楷書でも特異な字形が見出せる。同じ「神」の楷書でも『全図譜』七三、二二二、三七〇ではきちんと「ネ」と書いている。あるいは、『全図譜』二四六、二四七、四一九のような行書の「神」を写そうとすれば、①のような字形に近くなるかもしれないが、それなら、「申」の最後の点を付け忘れている。中尾本は行書「神」の傍の点に関心が薄いようでもある。それは1丁裏1の「神」の字形を見ても分かる。他の線に比べ異様に細く、後から取ってつけたような連筆で書かれている。

⑤ 「軍」は、すでに山本唯一氏が「芭蕉がこんな間違いをするはずがない。こんな「軍」を書いた例は芭蕉の資料にない」と指摘されたものである。これに対し櫻井氏は誤りがあることが自筆の証明で、「転写の方にこそきちんと写そうとするので、誤りが発生しにくいと考えてよいだろう」と反論されている。¹⁸⁾しかし、他者による転写の方が誤りが少なく、自筆の方こそ誤りが多いなどと決めつけることができるだろうか。逆に、他筆転写本の方こそ、原稿の誤脱もそのまま写してしまったり、目移り・誤読など不注意による誤り

も発生しやすい。櫻井氏の論は暴論と言わざるを得ない。

⑥は異体字字典にもない。中尾本には、⑥の二行後(12表2)にも同じ「軍」の字があるが、正しい字で書かれている。『新・古代学 第3集』(一九九八年七月)掲載の⑥の貼紙下写真にも、正しく書かれているのが読み取れる。『全図譜』二二二、二二三でも同様である。自筆説を主張するのであれば、なぜ芭蕉がこのようない画少ない「軍」を書いたのか、合理的説明が求められる。

⑦は通常「雁」の省略形で、中尾本でも「初雁」(29裏7)にこの字形を使っている。『全図譜』一五六でも同様である。「摩」の省略形は「𠂔」で、「𠂔」と書く例は『全図譜』にも見出せない。

⑧の「見」と書く「見」は一般の字典には見られない。異体字字典には見られるが、非常に特殊である。『全図譜』には四一六、四一八に「見」の通常の草書体が見られるが、⑧の用例はない。中尾本にある特異な字形はこれだけに留まらない。

⑨「佳」を「佳」のように書く時、三画目の点「ノ」がない字形(13裏5・同7・18裏10)。

⑩「恐」を「恥」の下に「心」と書く字形(20表9)。

⑪ 楷書「面」の一番下の横棒がない字形(24表6)。

⑫「葦」とも「葦」「草」とも見られる字形(30表7)。

⑬⑭は後述の⑰とあわせて山本唯一氏が指摘されたものである。

芭蕉自筆を否定する文字たち

同氏は『全図譜』の用例と比べ、字形や筆法・運筆の上で、中尾本は芭蕉自筆の文字とは違う。別筆であると結論づけられている。^⑭

⑮の「面」も『全図譜』に22例見出せるものと、字形・筆法・運筆とも異なる。⑯同様一番下の横棒のない『全図譜』二六八の場合も、右側の線が丸く弧を描くように書かれていて、楷書のようにきっちり書かれている⑰とは明らかに違う。

⑱は上野・櫻井氏が「葦を刈る」と翻刻された文字である。上野氏は『全図譜』二九八にある「葦」と同じ運筆の文字と見ておられる。^⑲しかし、両者を比べると、中尾本は「干」、『全図譜』は「平」と、下部の字形が異なり、後者は横棒も一本多い。

運筆面でも『全図譜』では上部から下部へと筆が自然に動いているが、中尾本では途中で一度筆脈が切られ、改めてその下に「干」が書かれ、上部に続けて下部を書くという筆意は観察されない。したがって、両者を同じ運筆と見る上野説には従えない。

中尾本の字形に一番近いのは『全図譜』一五四にある「葦」である。しかし、「葦」であれ、「葦」であれ、中尾本のように筆脈を途中で切るのは不自然である。あるいは、『全図譜』一五八の「草」のような字形を、どんな文字か意識せず、形だけ写そうとした結果^⑳のような中途半端な字形になったのかも知れない。

このように、単に形だけ写そうとした結果、運筆が不自然であっ

たり、文字として破綻をきたしていると思われる例は他にもある。

- ① 不必要な連筆がある「涙」(2表5)。
 ② 之繞しんじょうが旁より外に出ない「返」(4裏13・5表5・18裏4)。

k 最後の縦棒が離れている「市」(5表14)。

l 文字の連綿が「泉」の途中で切れている「温泉」(6表13)。

m 旁の上部が「久」の連筆になっている「浄」(8表1)。

n 旁を「兮」のように書く「朽」(16裏8)。

o 「置」をくすした字形のように書く「遅」(21表3)。

p 横棒が一本多い「若」(24表6)。

③ ①の「涙」は中尾本9丁表3や『全図譜』三のものとは比べると、旁に不自然な連筆がある。「ろ」のように下ろしてきた筆がそのまま左に行かず、一度上げられている。不要で他と異なる連筆である。

④ ①は前出③と同様、山本氏が指摘されたものである。²⁷⁾之繞しんじょうを書く意識がないから、筆が「反」の左に弧を描かないのであろう。

「市」は中尾本28丁裏13に一例、『全図譜』にも24例見出せるが、kのように筆脈が途切れているものはない。kは「云」の下に縦棒を書いていて、「市」の文字を書いていない。ここも前述の③と同様、形だけ写そうとしているから、このような不自然な連筆になっているのであろう。同様のことは、次の「」にも言える。

l は「温泉」の「温」を書いた後の連筆が間違っている。「泉」は初画の点から入って二画目の縦棒に続くのが通常の連筆である。

中尾本26丁表10、同裏7、『全図譜』二〇九では正しく書いている

ところが、lは「温」から続く筆が「泉」の初画となり、その後、縦に行かず横棒を書いている。さらに、ここで筆脈を切っているので、「泉」が分断され、異様な字形になってしまっている。「温泉」という単語を書く意識がないから、このような不自然な連筆が見られるのである。自筆説を探るのであれば、芭蕉が同様の書き方をしている証拠を示す必要がある。この一点だけでも、中尾本が芭蕉以外の者によって書かれた転写本であることを雄弁に物語っている。

m については、『全図譜』四一八に同じ書体があり、「これも芭蕉の書き癖」という田中善信氏の発言がある。²⁸⁾しかし、詳細に検討すると、mは旁が「久」の形になっていて、『全図譜』とは少し異なる。連筆もmと『全図譜』とは明らかに異なっている。

nは旁が「兮」になっていて、「朽」の文字を書いていない。真筆ではないが、『全図譜』一一一にある「朽」とも連筆が異なる。

oは同じ中尾本の「遅」(10裏7)と「置」(18裏6・27表8)を参照すると、之繞の膨らみがなく、「置」を書いているようにも見える。当然、『全図譜』一五五、四〇五の字形とも異なっている。

pの「若」は、『全図譜』七三に近い字形が見られるが、そこで

は「ソ」と書いた筆がそのまま左斜め下に向かっているのに対し、中尾本では明瞭に「ソ」の下に横棒を三本引いている。このような「若」の字形は『全図譜』のみならず、通常でも見出せない。

以上、上野氏が指摘されなかった、中尾本にある「通常の字体と異なる特徴を示す漢字」16例を示した。これらは『全図譜』にも見出せない非常に特殊なものである。中尾本の一万六四一字を総点検した^②という上野氏が、これら16例もの漢字を見過しておられたのは不審である。まさかこの事例を知りながら、自筆説に不利ということで恣意的な資料操作をされたとは考えにくい。前述のように、同氏は仮説立証型の演繹的方法を採られている。そのために自筆説の証明に使えない文字には注意を向けられなかったであろう。

④ p 十六の事例に共通しているのは、文字、あるいは文脈を意識せず、形だけ似せて書こうとした結果、誤字、あるいは不自然な字形・運筆になってしまっているということである。もし、中尾本が芭蕉自筆であるなら、芭蕉は何も考えずに自分の原稿を写していたことになる。中尾本は他筆による転写本と考えた方が自然である。

三 中尾本は他筆転写本

中尾本の特異な字形からも他筆による転写本という結果が導かれたが、これは、以前、拙稿で述べた結論と一致する。

芭蕉自筆を否定する文字たち

前稿では、中尾本に多数ある推敲とは見られない訂正の跡をもとに、他筆転写本説を導いた。この観点からも再度中尾本を検証しておきたい（後から挿入された部分には傍線を付した）。

- ① 「十尽る所橋をわたつて」↓「十景尽る所」(5裏16)
- ② 「館代馬にて送らる」↓「館代より馬にて」(6表8)
- ③ 「杖にも柱にも此木を給ふ」↓「此木を用給ふ」(8表3)
- ④ 「別室の跡座禪など有」↓「座禪石など有」(14裏4)
- ⑤ 「これをいなふと云」↓「いなるふねと云」(19裏1)
- ⑥ 「戸板を夕すみ」↓「戸板を敷て夕すみ」(23表9)
- ⑦ 「予を逢十とせ余り」↓「予を尋逢十とせ余り」(28裏9)

これらは訂正前の本文では文意が通じない。特に⑤⑥⑦は、中尾本が自筆の草稿ではありえない例証となる(図Ⅲ参照)。

⑤は最上川下りの部分にある。中尾本では、「左右山おほひ茂みの中に舟を下す」と描写し、「この舟をつけて、これをいなふと云」と続けている。特に、「いなふ」と次の「と」は連続していて、中尾本を書いた人物が何の迷いもなく、一気に筆を進めたことは明白である。もし、この人物が文脈を意識しつつ、丁寧に筆を進めていたならば、このような過ちは決して起こさなかつたはずであろう。

⑥は象潟での低耳の句である。中尾本には貼紙された上に大きく明瞭に「蛭の家や戸板をタすゝみ」と書かれている。そして「を」と「タ」の間に挿入符号があり、その右に小さく「敷て」が傍記されている。この点から、中尾本を書いた人物が、「戸板をタすゝみ」と書き終えるまで、自身の過ちに全然気付かなかったことがわかる。

「蛭の家や戸板をタすゝみ」では文意も通らないし、当然俳諧にもなっていない。初心者でも犯さないような不注意な過ちである。

⑦は福井俳壇の古老等裁が十余年前前に江戸の芭蕉を訪ねてきたことを書いているのだが、「予を遙十とせ余り也」では、まったく日本語になっていない。結局、自分で考えながら文章を書いているから、このような間違いを平然と犯しているのである。

他にも、中尾本には他筆による転写本説を裏付ける、目移りによる誤写が多数見られる（ノは改行、消された文字は傍線で示した）。

⑧ 「春(を) 改れは」(1表11)

⑨ 「やさしかりノかりければ」(5表1)

⑩ 「旅心定りぬいかてノいかてみやこへと」(6裏11)

⑪ 「茂み中の中に舟を下ス」(19表13)

⑧は一度「春を」と書いて、かぶせ書きで「改」と直している(図IV)。「越」を字母とする平仮名と「改」の字形が似ていること、

またこのすぐ右隣に同じ「越」を字母とする平仮名「を」が見られることから、目移りで誤写してしまったのだろう。書写の初め、一丁表からこのような不注意による誤写が見られることは大いに注目させられる。中尾本書写者がこのような作業に不慣れであったのか、あるいは当人自身の教養のなさ、性癖を露呈しているかと思われる。

⑨⑩⑪も書写の際によくある目移りによる誤写である。このような誤写は訂正が施されないまま、見落とされている場合もある。

⑨ 「富士の峯かすに見えて」(1裏12)

⑩ 「仏頂和尚の山ノ山居の跡有」(5裏5)

⑪ 「栗といふ文字は栗の木とノ書て西方浄土に」(7裏14)

⑫ 「仏を安直す」(16裏7)

⑬ 「かすに」は「かすかに」の「か」を書き落としている。⑬

⑭の「山山居」は改行による目移り、⑭も「西」とあるべきところを、前の「栗」の字にひかれた誤写、⑮も「置」と「直」の草書体の類似による写し間違いであろう。⑮の例からすると、前出の「遅桜」も「置桜」と書いていると判断してもいいだろう。

⑯ 「さすかに打捨かたく日々路頭の…」(2裏10)

この部分、善良本では「日々」がなく単に「打捨かたく路頭の」となっている。上野氏は、「具」の草体「く」と「日々」の草体が相似するため、善良本書写者が目移りを起こし書き落としたと解さ

れた。しかし、中尾本他筆転写説をとると、上野説とは逆に、このケースも^⑬同様、中尾本書写者が目移りを起こし、形の似ている「日々」という余計な文字を加えてしまったとも考えられる(図V)。

中尾本が他筆転写本であることは、増田孝氏が、ア仮名の不安定な連筆、イ切れ切れになっていく筆脈や文字間の不自然な空き方、詰まり方を根拠に、すでに主張されている。この増田説は、以下のような点からも再確認することができる。

「a」はらひて(1表10)の「ら」が「し」に近い連筆。

「r」かよぶ(22裏9)の「よ」が「と」に近い連筆。

「s」おなじ(27裏3)の「な」の不自然な連筆。

「q」は仮名の不安定な連筆の例である(図VI)。特に、sは「猶」のような字形になっていて、その不安定さは同じ「那」を字母とする9丁裏5、10丁裏2、18丁表10のものと同じれば歴然である。

筆脈や文字間の不自然性の問題は、t uの仮名の連綿からも観察できる(以下、連綿が途切れている部分にはノを入れた)。

t 「之」を字母とする平仮名「し」の不自然な連綿

- (1) 「む／すふ／も／くや／し／雨なかりせ／は」(5裏8)
- (2) 「姿つ／し／なはずと」(10表11)
- (3) 「松か／うら／し／まの／和／歌」(15表1)
- (4) 「あや／し／められて

芭蕉自筆を否定する文字たち

- (17表6)
- (5) 「又／異／なり／松／し／まは」(22裏12)
- (6) 「磯／つたひ／し／て／む／かふの山陰に入」(25表5)

u 助詞・助動詞と疑問の係助詞の組み合わせである「にや」「とかや」の不自然な連綿

- (7) 「里／山／となせるに／や」(20表2)
- (8) 「義／朝／公／より／給／はら／せ／給ふ／と／か／や」(26表1)

「之」を字母とする「し」は、字形の特性から前後と連綿しやすい文字で、中尾本でも用例の86%が連綿している。(2)は前後の文字が連綿しているのに、「姿つ」「し」「なはずと」「と」「し」だけが不自然に切り離されている。(3)も有名な陸奥の歌枕「松浦島」が切れ切れに書かれ、自然な筆の運びが見られない(図VII)。

u も通常、連綿で書かれる組み合わせである。例えば、「にや」は『全図譜』に14例見出せたが、平仮名「丹」を字母とする一例(『全図譜』五)を除き、すべて連綿、あるいは筆脈が続いている。

ところが、(7)では「となせるに」まで続けて書かれているのに、「に」と「や」は完全に途切れてしまっている(図VIII)。よく見ると、「に」の末尾から真下に筆が流れているが、その先は「や」の初画に向かわず、当然筆脈もつながっていない。「にや」と連綿させないのであれば、「に」で一度筆を押さえ、改めて「や」と書けばい

い。不要で不自然な運筆である。たぶん中尾本の原本では、薄く「に」から「や」へと筆脈がつながっていたと推定される。それを写そうとして、「に」の末尾の筆が流れているのであろう。

このように中尾本は文字間の筆のつながり具合も悪く、至る所で筆の途切れているのが目立つ。これは芭蕉模造品の一般的傾向と一致する。今氏は「原典を透写もしくは臨写するに当たって、原典の字形に似せることに気を取られ、ところどころ手を休める結果、筆が紙面を離れるために起きる現象」と説明されている。

以上、①～⑭までの字形・運筆・筆脈に関する二十一の問題点、⑮～⑰までの本文自体に関する十六の問題点、これらすべてを勘案するに、中尾本が芭蕉自筆でありえないことは決定的である。

おわりに

櫻井氏は癖字の問題以外にも、ア貼紙下の文字、イヘラが刀子で削って消した跡を中尾本自筆説のプラス材料として挙げておられる。このアイが推敲の跡であれば、貼紙下や削られた未見の本文は芭蕉以外には書けず、自筆説にとって有力な例証となる。

しかし、貼紙イコール推敲の跡と単純に考えることはできない。8丁表では貼紙の上下ともに「菩薩」と書いている。12丁裏では「みる」に見せ消ちして「閑入」と訂正、その上にさらに貼紙して

「閑入」と書いている。いずれも推敲とは見なせない不要な貼紙である。また、6丁裏貼紙下の俳句では「早苗」を「早稲」と書く季語の間違いを犯したり、8丁裏貼紙下では、前述¹³「山山居」のように、「渡渡」と目移りによる誤写をしたりと、自ら他筆による転写本である痕跡を残している。¹⁴

イについても、逆に自筆説の否定材料と考えることもできる。『全図譜』にある推敲の跡は、いずれも墨による抹消、加筆訂正であって、一部付箋のような貼紙による訂正もあるが、すべて直接原稿に筆を入れている。中尾本が自筆の草稿であるなら、わざわざ手間暇のかかるヘラ等で削って削除せずとも、直接原稿に書き込めば済むことである。通常の推敲方法とは違う手法が使われていることも、中尾本芭蕉自筆説否定の論拠となるだろう。

上野氏は芭蕉の「書き癖」をもとに、『全図譜』にも模写と判定できるもの（元禄四年三月九日付・去来宛書簡など）があると指摘されている。その根拠は、ア全体に不確かな印象がある、イある特定の文字に芭蕉の誤字・筆癖とは別の文字が書かれている、ウ他の文字と細かく比較すると、別筆であると確かめられる、エ筆の流れが不安定で乱雑な印象を与える、などであった。

このア～エすべてに中尾本が該当することは既述の通りである。特に、「神」「軍」「泉」など、他の芭蕉真蹟類になく、筆蹟に重大

な欠陥のある文字の存在は決定的である。このような中尾本を芭蕉自筆と断定し、安易に『奥の細道』の本文改変や新たな真蹟認定などの行為は、芭蕉の文学のみならず、芭蕉自身をも冒瀆する行為と言えるだろう。また、上野・櫻井氏が主張される曾良本は中尾本の忠実な写しという説にも大いに問題がある。

例えば、中尾本4丁表12行目「碧潭に落岩窟に身をひそ」が、曾良本初稿では「…碧潭に落岩 / 身をひそ…」（4裏7～8）と、行末二文字分が空白で、後から朱で「窟に」が補われている（図Ⅹ）。上野・櫻井氏は、曾良本書写者が中尾本の「窟に」が読めず空白にした結果と推測された。しかし、この推測には重大な欠陥がある。

中尾本「碧潭に」の「に」と「岩窟に」の「に」は、ともに「丹」を字母とする同じ字形である。仮に漢字「窟」が読めなかったとしても、平仮名「に」が読めなかったということはあるえない。他にも前述^⑩、中尾本の「日々」が曾良本に書かれていない問題なども含め、曾良本が中尾本を写していないことは明白である。^⑪

中尾本には謎が多い。

- ① 誰が何のために書写作成したのか。
- ② 本文に夥しい貼紙や書き込みをして訂正をしたのは誰での理由は。

芭蕉自筆を否定する文字たち

- ③ 貼紙下の本文は未見の『奥の細道』草稿と見なせるのか。
- ④ 中尾本の訂正が曾良本初稿段階で止まっているのはなぜか。
- ⑤ 古田武彦氏が不審に思われた地名「三春」を貼紙部で「箕張」と誤記している（7表11）のはなぜか。

赤羽学氏が指摘された「茄子」を、芭蕉の時代に用例のない膏葉の意の「天茄」と誤記している（25裏7）のはなぜか。

- ⑦ 曾良本をはじめとする『奥の細道』主要伝本との関係。等々、中尾本に関する疑問は深まるばかりである。

このような中尾本ではあるが、多くの専門家が自筆と判断してしまっほど、芭蕉の面影を垣間見せていることも事実である。

今氏は、筆蹟に何らかの識別しうる欠陥があったり、偽印が押してあるというマイナス要件があっても、筆蹟全体として芭蕉の特徴をよく存し、発句その他の記述内容にも芭蕉の作品としての諸条件がすべて揃っている場合、その模造品の向うに真蹟原本が実在したことが想定できると考えておられる。その際、「この種の模造品は骨董価値はいざ知らず、芭蕉作品の研究上では真蹟原本の代役を勤めるに足る資料価値を持っている」と主張されている。

謎の多い中尾本ではあるが、曾良本ともその研究的価値の高さは否定できない。今後は中尾本芭蕉自筆説に囚われない自由な研究の進展が望まれる。

参考文献

- ・『芭蕉全図譜』(岩波書店、一九九三年)
- ・『芭蕉自筆 奥の細道』(岩波書店、一九九七年)
- ・天理図書館善本叢書 おくのほそ道 曾良本(天理大学出版部、一九九四年)

注

- ① 『岩波 日本史辞典』(一九九九年十月)、「奥の細道」解説。
 自筆説に明確に疑念を表明されたのは以下の通り。
 山本唯一氏
- (1) 京都新聞(一九九七年二月二日記事)、(2) 京都新聞(一九九七年四月一日寄稿)、(3) 『奥の細道』自筆本を疑つ『歴史と旅』七月号、秋田書店、一九九七年)、(4) 『芭蕉の文墨』その真偽』(『思文閣出版、一九九七年十月)、(5) 『奥の細道』(中尾本) 攷証』「恐」佳」返」の字形』(『俳文学研究』第31号、一九九九年三月)
- 増田孝氏
- (1) 『日本古書通信』(一九九七年五月号)、(2) 『奥の細道』芭蕉真筆の大ウソ』(『新潮』45 九月号、新潮社、一九九七年)、(3) 『奥の細道』の原稿発見をめぐる』(『墨』一三〇号、芸術新聞社、一九九八年一月)、(4) 『奥の細道』自筆本』の顛末』(『愛知文教大学地域文化センター叢刊』第六号、一九九八年六月)、(5) 読むという鑑賞法』(『墨』一三八号、芸術新聞社、一九九九年五月)
- 谷沢永一氏
- (1) 『卷末御免』(『Voice』一九九七年七月号、八月号)
- 赤羽学氏
- (1) 『奥の細道』の「片雲の風にさそはれて」の解釈』(『文学・語学』一五七号、一九九七年十一月)、(2) 『芭蕉の名』高く心を悟りて俗に帰るべし』(『風雪』一九九九年五月号)、(3) 「茄子」と「天茄」(安田女子大学大学院博士課程完成記念論文集)、一九九九年九月)、(4) 「茄子」と「天茄」贅言』(『就實語文』第二十号、一九九九年十二月)
- ③ 山村、平成新出本『奥の細道』をめぐる』芭蕉自筆か他筆による転写本か』(『大阪産業大学論集 人文科学編』九十六号、一九九八年十月)、国文学年次別論文集「近世Ⅰ」(平成10年)(朋文出版、二〇〇〇年八月)に再録。以下、印は同論集に再録の意。
- ④ 今氏、総説『芭蕉真蹟物の世界』(『芭蕉全図譜 解説編』、岩波書店一九九三年)。
- ⑤ 上野氏、国文学研究資料館一九九九年秋期特別展図録』(一九九九年十月二十五日発行)の「あとがき」。
- ⑥ 上野氏寄稿、朝日新聞夕刊、一九九六年十二月二日。
- ⑦ 上野氏、芭蕉自筆「奥の細道」の謎』(二見書房、一九九七年七月)。
- ⑧ 山本氏、中尾本は芭蕉自筆ではない』(『俳文学会第五十回全国大会発表資料』、一九九八年十月十八日)。
- ⑨ 山本氏、芭蕉の文墨』その真偽』(『思文閣出版、一九九七年十月)ならびに注⑧発表。
- ⑩ 村松氏、芭蕉翁正筆 奥の細道』曾良本こそ最終自筆本』(『笠間書院、一九九九年十一月)。
- ⑪ 上野氏、芭蕉の書き癖』(『芭蕉自筆 奥の細道』、岩波書店、一九九七年一月)。
- ⑫ 上野氏、新出「奥の細道」翻刻補註』(『文学』一九九七年冬号)。
- ⑬ 『芭蕉全図譜 解説篇』一五一頁写真。

- 14 今氏、同注④論文。
- 15 櫻井氏、「真贋に新しい方法論―芭蕉自筆奥の細道発表の経緯―」(『series 俳句世界別冊1 芭蕉解体新書』、雄山閣出版、一九九七年四月)。
- 16 上野氏、「奥の細道 自筆本発見の秘話」(『らうんじ』四月号、朝日カルチャーセンター、一九九七年三月)。
- 17 上野氏、同注⑦著書。
- 18 山本氏、「対談。奥の細道 芭蕉自筆本の真偽をめぐって」(『新古代学 第3集』一九九八年七月)。
- 19 櫻井氏、「新出・奥の細道(自筆本)について」(『親和国文』一九九八年十二月)。
- 20 山本氏、「『奥の細道』(中尾本) 攷証―「恐」「佳」「返」の字形―」(『俳文学研究』第31号、一九九九年三月)。
- 21 上野氏、同注⑫論文。
- 22 山本氏、同注⑭論文。
- 23 田中氏、「鼎談」新出本『奥の細道』をめぐって」(『文字』一九九七年冬号)。
- 24 上野氏、同注⑦著書。
- 25 山村、同注③論文。
- 26 上野氏、同注⑫論文。
- 27 増田氏、「日本古書通信」(一九九七年五月号)。
- 28 私に調査したところ、中尾本では「之」を字母とする平仮名「し」「二」一三の用例中、「一八四(86%)」が連続していた。ただし、連続していない二九例のうち八例(4%)は行頭か行末部にある。
- 29 『全図譜 五(二例)』一五四、一六六、一九二、二九三、三四一、三四九、三六一、三六三、三九七、四一七、四一九、四三二、以上十四例

芭蕉自筆を否定する文字たち

- 30 今氏、同注④論文。
- 31 櫻井氏、同注⑨論文。
- 32 他にも推察とは見なせない例証として次の五例が挙げられる。①貼紙「もりて」の下に「もりて」と書く(9表)、②貼紙「から」の下に「也」と書き、見せ消ちして「から」とする(13表)、③貼紙「かに」の下に「かにし」と書き、「に」に見せ消ちして「かに」とする(18裏)、④貼紙「のみ覚ゆ」の下に「計也」と書き、見せ消ちして「のみ覚ゆ」とする(18裏)、⑤貼紙「日和を」の下に「日和を待爰に古きふるき俳諧…」と書き、「古き」に見せ消ちして消す(19表)。
- 33 上野氏、同注⑦著書。
- 34 上野氏、同注⑫論文。櫻井氏、同注⑨論文。
- 35 中森康之氏は、中尾本は未完成のまま曾良本に写されるが、曾良本訂正の際には参照されなかったという説を発表されている(『新出本『奥の細道』の性格―底本修正問題をめぐって曾良本へ―』(『国文論叢』第26号、一九九八年三月)。
- 36 古田氏、同注⑮対談。
- 37 赤羽氏、同注②③論文。
- 38 今氏、同注④論文。

神

1 裏 1

神

2 46 後部

神

73

神

11 裏 10

②
神
【図 11】

神

5 表 15
下部

【図 1】
神

神

2 47 後部

神

2 22

神

23 裏 10

神

4 19

神

3 70

神

24 裏 9

初雁

29 裏 7

※初雁

戸伊摩

16 表 1

© 摩 (戸伊摩)

軍

2 21

軍

12 表 2

軍

11 裏 10

② 軍

軍

2 22

軍

11 裏
貼紙下

軍

2 22

雁

1 56

 24表 6	 20表 9	 196	 13裏 5	 14表 6
	 383	 343	 13裏 7	 416
 175		 417	 18裏 10	 418

 436	 417	 405	 401	 370	 237	 177
---	---	---	---	---	---	---

 437	 421	 410	 402	 379	 268	 180
--	--	--	--	--	--	--

 450	 430	 414	 404	 386	 272	 181
--	--	--	--	--	--	--

		① 返		① 涙		※ 草		① 葦?
327	4 裏 13		2 表 5		254		30 表 7	
						※ 草		
389	5 表 5		9 表 3		158		298	
								
444	18 裏 4		3					

							① 市
383	247	244	176	152	61	5 表 14	
							
400	336	245	187	156	73	28 裏 13	
							
406	354	246	238	175	75		

<p>⑪ 朽</p> <p>16裏 8</p> <p>朽</p> <p>1 11</p> <p>朽</p> <p>1 11</p>	<p>⑫ 浄</p> <p>8表 1</p> <p>浄</p> <p>4 28</p>	<p>⑬ 温泉</p> <p>26裏 7</p> <p>温泉</p> <p>2 09</p>	<p>⑭ 温泉</p> <p>6表 13</p> <p>温泉</p> <p>26表 10</p>	<p>⑮</p> <p>4 42</p> <p>市</p> <p>4 47</p> <p>市</p> <p>4 49</p>	<p>⑯</p> <p>4 07</p> <p>市</p> <p>4 30</p> <p>市</p> <p>4 35</p>
---	---	--	--	--	--

<p>⑰ 若</p> <p>24表 6</p> <p>若</p> <p>73</p>	<p>※置</p> <p>18裏 6</p> <p>市</p> <p>27表 8</p>	<p>⑱</p> <p>2 55</p> <p>市</p> <p>4 05</p>	<p>⑲ 遅</p> <p>21表 3</p> <p>市</p> <p>10裏 7</p>
--	--	---	---

【図Ⅲ】

⑤ 一歩も歩かずして

19裏 1

⑥ 此の家や戸板を踏むすくも

23表 9

⑦ 弓を引く色十と色竹也

28裏 9

【図Ⅳ】

⑧ 秋の石の葉も
年が方々改まる

1 表 10～11
行目上部

※那

那

9裏5

那

10裏2

那

18表10

⑤

那

27裏3

①

那

22裏9

④

那

1表10

【図VI】

⑬

那捨るるるりく略頭の

【図V】

⑪

(1)

那

20表2

【図VII】

(3)

那

15表1

①

(2)

那

10表11

【図VII】

2裏10

【図IX】 中尾本 4 丁表 12 行目

聖潭^{しやうたん}ふ^ふ為^な 岩^{いわ}窟^{くわ}ふ^ふ所^{ところ}を^をひ^ひと

※曾良本 4 丁裏 7、8 行目

飛流^{とせう}と^とて^て百^{ひやく}人^{にん}十^{じゅう}岩^{がん}乃^の聖^{しやう}潭^{たん}ふ^ふ為^な岩^{がん}窟^{くわ}ふ^ふ
所^{ところ}を^をひ^ひと^とめ^め入^いる^るに^に此^{こゝ}の^の書^{かき}は^はり^りと^とれ^れが^がふ^ふ

(朱筆)